様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2019
課題番号：２６３７０８８８

研究課題名（和文）縄文文化「続縄文期」における海獣狩猟集落の研究

研究課題名（英文）A Study on Marine mammal Hunting Villages in the Epi-Jomon period of the Jomon Culture

研究代表者
小杉　康（Kosugi, Yasushi）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：１０２１１８９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　北海道虻田郡豊浦町に所在する礼文華遺跡の発掘調査と出土資料の分析によって、1) 集中的活動域としての遺跡の範囲、2)中心的活動域と遺跡構成、3)小幌洞窟遺跡との関係を検討し、イルカを狩猟した縄文文化続縄文期の集落遺跡の実態を解明できた。
また、本州以南の地域では水稲耕作を行う弥生文化が展開する時期に、その強い影響を受けながらも、漁撈具の銛頭や土器群構成において在地的な技術と融合させながら、縄文文化の伝統を変容しながらも保持する点を明らかにできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　続縄文期は、従来「続縄文時代・文化」として北海道独自の時代区分・考古文化として理解されてきた。しかし、その集落構成と生業活動の実態、土器や漁撈具に見られる伝統的な技術の継承についての具体的な検討の結果、本州側の弥生文化と新たな関係を築きながらも、縄文文化の伝統的な生活様式の発展した考古文化であるとの理解に達した。その意味で縄文文化続縄文期という認識、呼称がより適切である。歴史教科書における北海道地域の人類史を再検討するきっかけになる研究成果である。

研究成果の概要（英文）：I conducted archaeological excavations at the Rebunge site, Toyoura Town, Southern Hokkaido, and analyzed the excavated materials. As a result, I solved the actual condition of dolphins hunting village ruins in the Epi-Jomon period of the Jomon Culture.I found out that the people of the Epi-Jomon period had been strongly influenced by the Yayoi culture of Honshu, and they fused the Yayoi technology with the local one, in the pottery group composition and the harpoon for fishing gear, but they still retained the Jomon culture tradition.
In addition, I examined the village composition and livelihood activities of the Rebunge site, and the traditional techniques found in potteries and the harpoons.As a result of our research, we understood that the Epi-Jomon period was closely related to the Yayoi culture, but it was an archeological culture that had developed from the traditional lifestyle of Jomon culture.

研究分野：考古学

キーワード：考古学　縄文文化　続縄文期　海獣狩猟　礼文華遺跡　小幌洞窟遺跡　銛頭　続縄文土器

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)　礼文華遺跡（旧称：礼文華貝塚）は峰山巌・山口敏らが実施した 1963 年から 1965 年の 3 季にわたる発掘調査によって、「続縄文文化（恵山期）」の貝塚、墓地遺跡であることが明らかになった遺跡である。その後、大島直行らは伊達市に所在する有珠モシリ（旧称：有珠 10 遺跡）の発掘調査の成果を受けて、「続縄文文化」に対する弥生文化の影響を検討するために、1991 年に礼文華遺跡での発掘を実施した。弥生系の文物であると推定される土製紡錘車を発見し、また 20×8m の範囲で貝層の広がりを確認することができたが、1960 年代の峰山らの調査地点を確認することはできなかった。また、その後の歯冠計測値を用いた研究では、恵山期の墓址から発見された人骨は「弥生人的」であることが指摘されている（松村 1998）。

(2)　私は、2000 年～2005 年にかけて伊達市有珠 6 遺跡（科研基盤 B；2002 年 4 月 - 2006 年 3 月「噴火湾岸域における後氷期の自然環境の変動と人類適応」）、2006 年～2011 年にかけて豊浦町小幌洞窟遺跡（科研基盤 B；2006 年 4 月 - 2010 年 3 月「噴火湾北岸縄文エコ・ミュージアム構想とサテライト形成」）での発掘調査を実施して、それぞれを「噴火湾北岸縄文エコ・ミュージアム」のサテライトとして整備するための学術的データと資料の調査･研究を進めてきた。その間の 2010 年には、冬季から春先にかけてのオットセイの狩猟キャンプの性格をもった小幌洞窟遺跡（特に続縄文期）の本村的性格をもった可能性が高いと推測される礼文華遺跡の地形測量調査を実施した。測量範囲は 1991 年の大島発掘区を中心として、周辺地形や基準点との位置関連を明らかにすることができた。

(3)　以上の準備期間を経て、今後数年間の予定で、この礼文華貝塚及びその周辺で本格的な調査を計画した。全体の調査目的は前述の「噴火湾北岸縄文エコ・ミュージアム」のサテライトとして礼文華遺跡を整備保存することであり、またそのためには学術的な担保として道南地域における続縄文文化の実態を実証的により明らかにすることが最重要課題となる。従来の調査・研究の成果を引き継ぎながら、噴火湾北岸に展開した人類文化の解明に取り組み、その成果を地域資源・文化資源としての形成につなげて行きたい。

なお、以上の調査・研究の経緯を鑑みて、1963-65 年の峰山・山口調査を礼文華遺跡第 1 次調査、1991 年大島調査を同第 2 次調査として、今回の調査を同第 3 次調査と位置付ける。

２．研究の目的

北海道南西部、噴火湾北岸の海岸河口部に立地するイルカ漁を生業とする母村的集落遺跡と、屹立する断崖直下の海蝕洞窟に立地する季節的なオットセイ猟をおこなうキャンプサイト的遺跡との遺跡間関係を分析し、続縄文期における海浜部での漁撈活動、特に海獣狩猟活動の実態を明らかにする。また、その成果に基づいて、従来「続縄文時代・文化」として理解されてきた時代区分、考古文化の認識を再検討し、縄文文化の晩期に引き継ぐ縄文文化「続縄文期」を提唱する。

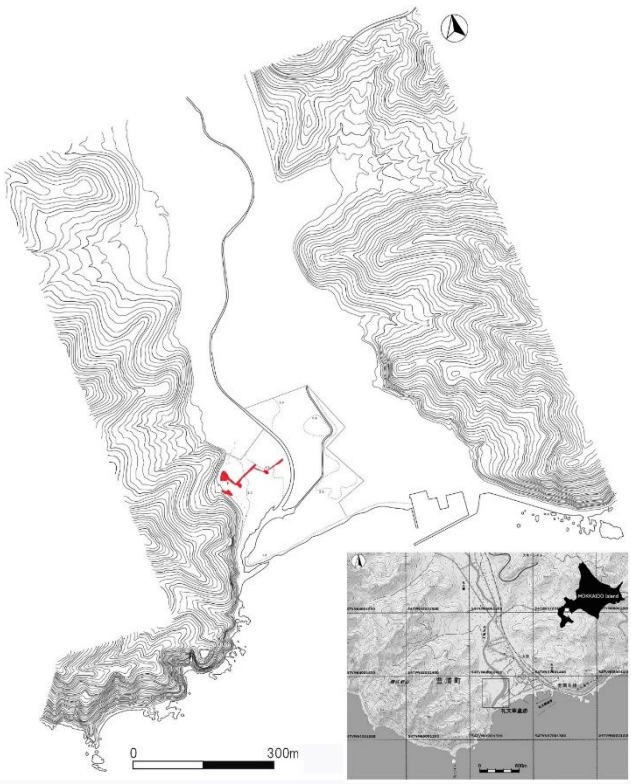

図1 礼文華遺跡周辺地形測量図

３．研究の方法

(1)　礼文華遺跡周辺の分布調査

①　遺跡周辺の詳細分布調査の実施

②　礼文華遺跡から小幌洞窟遺跡にかけての山間部を対象として、試掘調査をともなう分布調査の実施（調査地点の記録には GPS を活用する）

(2)　礼文華遺跡及び周辺の地形測量調査（図 1・図 2 参照）

(3)　礼文華遺跡の発掘調査

①　範囲確認調査：遺跡の南側・東側・北側への広がりを確定するための範囲確認調査を実施する。現地は河畔林のブッシュによって広く覆われているために、はじめに下草の除去を行う。発掘はランダム・グリッド法で試掘坑（1×1～2m）を 40 カ所ほど設定し、実施する。（図 2 参照）

②　貝塚の発見と発掘調査の実施

③　墓域の発見と埋葬人骨の発掘調査の実施

④　イルカの捕獲場所あるいは解体場所の発見と発掘調査の実施

⑤　年代測定と同位体食性分析の実施

(4)　小幌洞窟遺跡出土遺物の再検討

(5)　礼文華遺跡発掘資料の整理と報告書の作成

(6)　関連学会・学術雑誌での成果の公表

(7)　発掘調査・分布調査・測量調査の成果に基づき「噴火湾北岸縄文エコ・ミュージアム」サテライト No.3「礼文華遺跡」の整備計画の策定

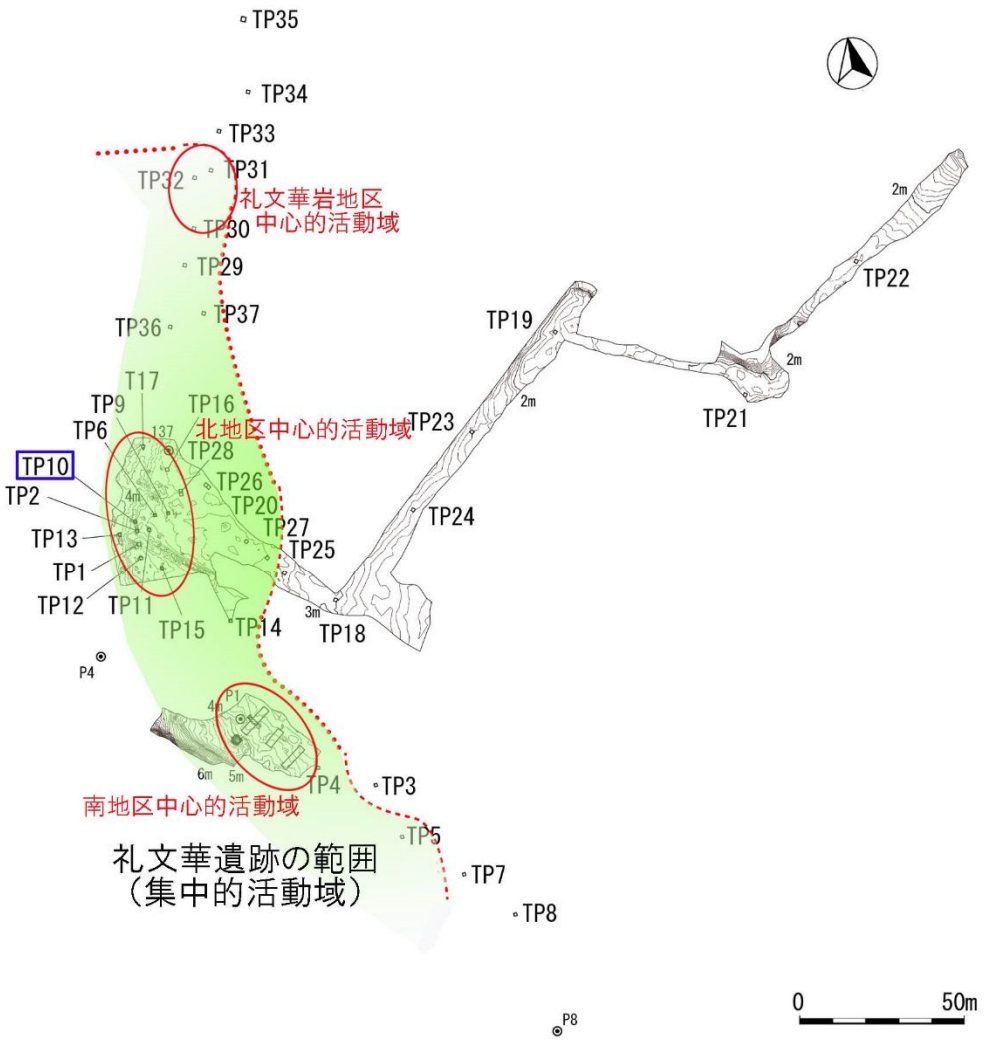

図2　試掘坑(TP)の配置と遺跡の集中的活動域の推定

４．研究成果

本研究全体の成果は以下の 5 点にまとめられる。

(1)　礼文華遺跡の範囲の確定

遺跡の広がりとしては礼文華川河口の西側の山塊裾部にそって南北約 250m、礼文華川側に向かって東西約 50m の範囲が「集中的活動域」であることが判明した。（図 2）

(2)中心的活動域と遺跡構成の解明

この広がりの南北の中央付近には西側山塊斜面から流れ込む小さな谷地形があるが、それを境に南側と北側とにそれぞれ貝塚を伴った「中心的活動域」が展開する遺跡構成が明らかになった。北側の中心的活動域では活動前半期における貝層の形成から活動後半期における土坑墓の形成へと場の機能が転換することが判明した。（図２）

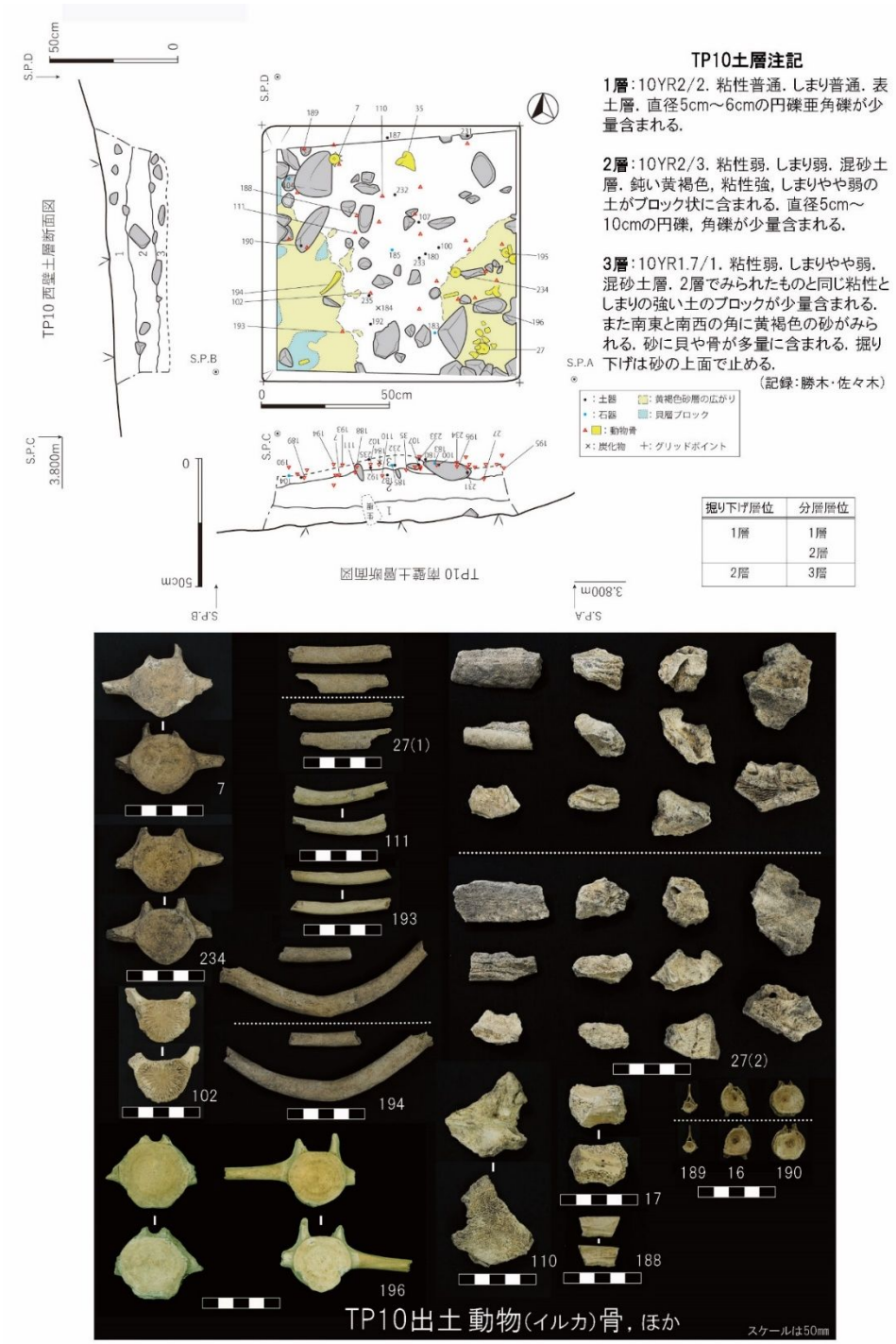

図3　TP10の発掘（中心的活動域におけるイルカ遺存体の集中的出土）

(3)イルカ捕獲集落の実態の解明

遺跡での活動期間全般にわたってイルカの遺存体を確認することができた。このことから突発的なストランディング（鯨類座礁）ではなく、イルカ猟が継続的に実施されていた可能性が高いと言える。捕獲方法については舟を利用した海上での捕獲と、海岸の浅瀬を利用した捕獲とが想定される。海岸での捕獲場所と解体場所を特定することはできなかったが、北側の中心的活動域内に解体後の遺存体が集中的に出土する地点を確認できた。（図３参照）

(4)小幌洞窟遺跡との関係の解明

礼文華遺跡と小幌洞窟遺跡は同時期に併存し、遺跡としての規模差、それぞれに特化したオットセイ猟(小幌)とイルカ猟(礼文華)との補完的・対照的な関係などを考慮すると、本調査当初に予測した母村とキャンプサイトといった関係がより強まったといえる。ただし、両遺跡から出土した土器や石器の構成内容・量は、それぞれの機能差を示す内容ではなかった。この点については、本州からの弥生文化の伝播といった時代的文脈を考慮した今後の研究計画を企画したい。

(5) 縄文文化続縄文期の呼称の提唱

従来「続縄文時代・文化」として北海道独自の時代区分・考古文化として理解されてきた。しかし、本調査の成果を踏まえて、縄文文化晩期以降の北海道南西部地域には、本州側の弥生文化と新たな関係を築きながらも、漁撈具の銛頭（図 4）や土器群構成（図 5）において在地的な技術と融合させながら、縄文文化の伝統的な生活様式の継承した考古文化が展開したとの理解に達した。その意味で縄文文化続縄文期という認識、呼称がより適切である。歴史教科書における北海道地域の人類史を再検討するきっかけになる研究成果である。

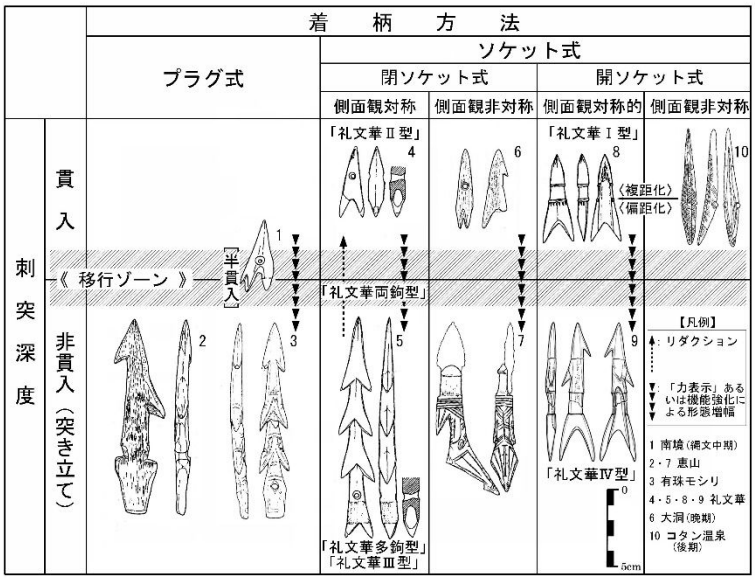

図4　続縄文期の銛頭の形成と構成

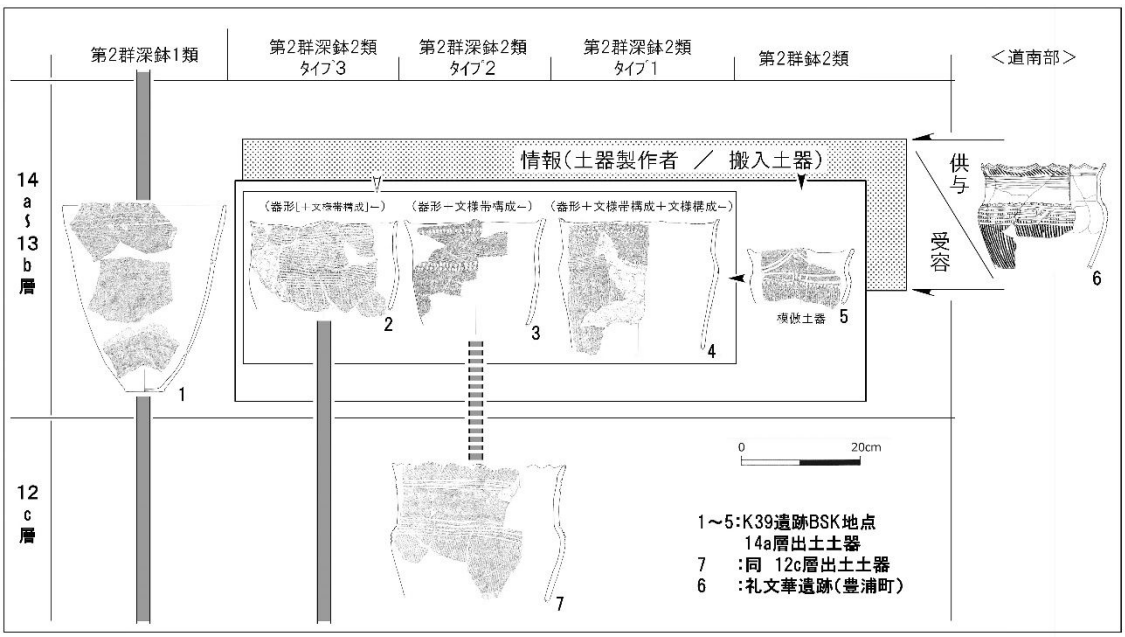

図5　続縄文期の土器群構成の一例（札幌市K39遺跡BSK地点と礼文華遺跡との比較）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小杉　康	４．巻 53輯
２．論文標題 続縄文期初頭の土器群構成について	５．発行年 2017年
３．雑誌名 北海道考古学	６．最初と最後の頁 131,152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小杉康	４．巻 52
２．論文標題 続縄文期前半における礼文華遺跡の銛頭	５．発行年 2015年
３．雑誌名 北海道考古学	６．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小杉康・高瀬克範・渡辺つづり・神田いずみ	４．巻 51
２．論文標題 北海道虻田郡豊浦町礼文華遺跡の第3次調査第1～3次シーズン概要報告	５．発行年 2015年
３．雑誌名 北海道考古学	６．最初と最後の頁 79～88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小杉康
２．発表標題 豊浦町礼文華遺跡第3次調査第4～6シーズン
３．学会等名 北海道考古学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 小杉康
２．発表標題 イルカを狩るムラ・オットセイを狩るムラ―礼文華遺跡と小幌洞窟遺跡―
３．学会等名 日本考古学協会第81回総会
４．発表年 2015年

〔図書〕　計1件

１．著者名 小杉康	４．発行年 2020年
２．出版社 自費出版	５．総ページ数 46
３．書名 礼文華遺跡第3次調査―遺跡範囲確認調査の記録―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考